

## 論説

### 武者小路実篤『若き日の思ひ出』論

-戦争イデオロギーとのかかわり-

楊 琇媚

#### はじめに

『若き日の思ひ出』は、「母の面影」という原題で、昭和二十年五月二十二日から十月二十五日まで、一〇三回にわたって「陸輸新報」に連載された作品である。翌年の四月五日、座右宝刊行会より単行本が刊行された際に、『若き日の思ひ出』と改題された<sup>1</sup>。また、単行本では、作品の冒頭の第一章が全面的に書き換えられている。大津山国夫氏は、削除された「冒頭の特攻隊にたいする感謝が占領軍の検閲にふれることを避けたのでであろう」と推測している。初出の冒頭で問題になったと思われる部分は次のようなものである。

私はもういゝ齢になつた。私は今の日本に生きて、今まで経験したことのないいろいろの経験をしてゐる。私は別に今の日本に役に立つやうなことはしてゐない。私は相変らず小説をかいたり、絵をかいたりしてゐる。それも今の時勢でないと書けないものをかいてゐる。それだけ今の若い人がよく働いてくれてゐるのに、感心もし感激もしてゐる。これでこそ日本は強いのだと思ふ。殊に特攻隊の人々のことを思ふと、さういふ人がゐてくれるので、自分達は負けずにすめるのだと思つて、深く感謝するのだ<sup>2</sup>。

作品の執筆期間について、作者の「後書き」によれば、「途中で一ヶ月近く休んだことが二三度あつたので、今年の三月頃から書き始め、八月末に書き上げた<sup>3</sup>」ということが分かる。そして、作品の執筆期間の一部に該当する敗

戦直前と直後という、作者が秋田県の稲住温泉に疎開していた頃に付けた日記『稲住日記』（向日書館、昭和二十二年一月）を参考にすれば、次のように事実を整理することができる。

- 八月十二日 「原稿気になれど、未だ乗気になれず、丁度一と月小説（『若き日の思い出』を指す—引用者注）すてゝある、（後略）」
- 八月十三日 「陸輸新報九日分送ってくる、五十九回—六十三回はとどいたのか、どうか。」
- 八月十八日 「朝うすくらい時起きて小説をかく、いづらか乗気になつて来た、しかし小説らしい面白味はまだ出ない、存外早く終るかと思ふ、九一回と九二回目をかく。」
- 八月十九日 「百回前後で終へるつもりだ。九十四回の終りまでかいた、（後略）」
- 八月二十日 「朝食前湯に入つたあと原稿をかく、九十七回迄時間のたつとも知らずかく、（後略）」
- 八月二十一日 「朝未明に起き電燈つけて小説のつゞきかき、百回目にかゝる、（後略）」
- 八月二十二日 「未明に起き、電燈つけ小説、百二回までかき、最後の処で一休みした、それから湯に入り、朝食をすませ、一眠りして百三回でやつと小説かき上げた、一安心。<sup>4)</sup>

また大津山氏によれば、この小説が連載された昭和二十年には、日刊新聞「陸輸新報」は休刊が多く、連載中の休刊がのべ四十九日もあった他に、新聞は発行されたが、小説が休載されたというケースも三日あったということが分かっている。連載の細目は大津山氏のまとめに従えば、次のようなものであった<sup>5)</sup>。

一 (章)	五月二二日	六四四号
一〇	六 五	六五三
二〇	一六	六六三
三〇	二九	六七四
四〇	七 一五	六八五
五〇	二九	六九六
六〇	八 一一	七〇七
七〇	三一	七一七
八〇	九 二三	七二七
九〇	一〇 九	七三七
一〇〇	二一	七四七
一〇三	二五	七五〇

この作品は従来、「長年母の庇護の下にあった主人公『私』（野島厚行）が療養のためにK海岸へ一人旅に出かけ、そこで同級生の宮津とその妹正子に出会う。そして、それをきっかけに様々な人物との交流を通して『私』は成長し、また、正子との恋をも成就させる<sup>6</sup>」といった、主人公「私」の成長物語として解釈されてきた。

また、大津山氏は『若き日の思ひ出』は昭和二十年の作品であるのに、「ほとんど戦時色を感じさせない。これが戦争末期の作品かと思議に思われるほどである」と述べ、『若き日の思ひ出』とは対照的に戦争協力の作品と見なされている『三笑』がむしろ例外的な作品であったと結論づけている<sup>7</sup>。

しかし、作品を深く読んでいくと、主人公が死の恐怖を克服し「大の日本人として」「生き抜く」力を身につけるようになった描写や、主人公の若き日の成長物語としては、唐突感を覚えさせる結末部の「母性賛美」の挿入などといった、むしろ戦争イデオロギーを思わせる部分の方が注目されるように思われる。

この作品は主人公「私」の思い出が語られる作品ではあるのだが、原題で示されている通り、「私」の母が登場する場面が多く、さらに、結末の場面で、「私」の婚約者である正子の父が原題と同じ「母の面影」と題した文章を書

いていることから考えれば、「母」の表象が作品に大きな意味を付与しているように思われる。よって本稿では、原題の「母の面影」という意味に注目し、「死」から「生」への転換<sup>8</sup>の過程をたどりながら、作中に散見される「母性イデオロギー」の表象、また「生殖」への強調をキーワードとして、本作品を読み解いていきたい。

## 1. 「私」と宮津の父の関係性-精神上的の父子

「私」が宮津の父が書いた「母の面影」を読んだ後に、「自分の母のことがかゝれてゐるやうな気がしました」と言っていることから、「私」の思い描く母親像が宮津の父が語った母親像と重なっていることがうかがえる。その上、「私」の成長する過程で、宮津の父の考え方に影響される部分が多く見られるため、ここでは、まず、「私」と宮津の父との関係性を明らかにしていきたい。

「私」が宮津の父に初めて会ったのは、療養地の近くにある宮津家の別荘に行ったときであった。宮津の父は「私」に対する印象を直接語ってはいないのだが、後の宮津の話によれば、それは次のようなものであった。

野島さんといふのは一寸変つてゐるね。頭の格好が実にいゝ、それに真剣さがある。お前の友達に野島さんのやうな人がゐると思ふと、お前を見直すよ。あゝいふ友達は大事にしなくつてはいけない。(三二)

これは「私」に対する非常に高い評価と言える。しかし、そのとき「私」はほとんど口を閉じていたし、宮津も父に「私」のことを何も説明しなかったのであるから、「私」を評価できる客観的な根拠が示されていないにもかかわらず、宮津の父が一目で「私」を見抜いたというのは、読者には不思議でならないであろう。また、宮津の父が語った人生論などを聞いた後、「私」は帰りに「すっかり元気になり」「行きとちがつて新しい決心した男」となったと同時に、宮津の父の信奉者にもなったようである。

このように、「私」と宮津の父は互いの人間性を認めることで、密接な関係を見せているのである。また、「私」に立派な人間になるという尊い理想を

持たせてくれた宮津の父は、常に自信を持たない「私」を勇気付ける存在でもある。

さらに、宮津の父が極端に「私」に好意的な態度を示している場面がある。それは、正子の家庭教師沢村をも含めての食事のときであった。「家庭教師は主に宮津の父と何か学問上の話をしてゐるやうです。私は正子だけを見てみればいゝのです」という描写からも分かるように、「私」は学問や勉強よりも正子への恋愛を第一に考えているが、それにもかかわらず、宮津の父は「私」が有望な人間になれると大いに期待をかけている。そして、続く宮津の父による「人間の値打」云々という説教の場面においても、「私」が宮津の父の思考に付和しているかのような描写や、宮津の父が「私」の考えに同調するかのような発言に注目するならば、「私」と宮津の父はなんの疑問もなく互いの思考を受け入れており、二人の考えがほぼ一致していることは明らかである。

こうして、宮津の父が「私」をまるで自分の分身のように捉え、「私」を完全に肯定してくれることには、「別に理由はな」く、ただ「私」が「自分の精神的な子供」のようだからだと述べられている。確かに、宮津の父は「私」に、「あなたの誠意が、私の誠意にふれたのです。あなたの心が、不思議に私の心にふれたのです」と言っているが、しかし「私」の誠意や心がどのようなものなのかに関しては、具体的な描写はほとんど欠けている。むしろ、「私」が、思い通りにならないことが生じた際に、くじけたり嫉妬心を生じたりするような場面が多く描かれていることから、このような宮津の父の「私」に対する評価は恣意的なものであり、一方的であるように思われてならないのである。一体、このような「私」と宮津の父との関係性をどのように解釈すべきなのであろうか。

中川孝氏は『若き日の思ひ出』には、二つの特徴が見られ、武者小路の恋愛小説の中でも、「独自の位置を主張するものと言える」と述べている。その特徴の一つは次のようなものである。

その一つは、作者自身の少年の日のありのままの自伝が何の潤色もなしに、まずこの作の書き出しとなり、また作中にも色々織りなされている事であります。色々これまでも自ら書かれた少年の日の思ひ出が、

ここでは老成の日の作者の目に、最も純化し、心暖まる筆で綴られているわけです。これは作者の生い立ちを知る貴重なる資料とも言い得るものです。読者にも、その意味でも興味深い記述と言い得るでしょう。

つまり、この作品には作者の自伝的要素が織り込まれているという。実際、作品を見てみると、主人公の「私」が三歳のときに父を失い、十五歳のときに姉が死んで、兄と母三人で暮らしてきたとする設定や、中学校の同級生である西幸熊の死というエピソードの描写などは、ほぼ事実に沿って書かれているのである。そのため、「私」には若い頃の作者の姿が投影されていると見てもよいと思われる。一方、宮津の父は六十歳という年齢で、作品執筆時の作者の年齢とも重なっており、また、彼が語っている人生論などはいかにも作者の思想そのもののように思えるため、宮津の父はいわば作者のもう一人の分身であると考えられる。

要するに、「私」は若い頃の作者なのであり、宮津の父は作品執筆時点の作者であるというようにも考えることができる。「私」にせよ、宮津の父にせよ、二人とも作者の分身であると言える。だからこそ、「私」はなんの疑問もなく宮津の父の思考に追随することができるし、宮津の父もなんの理由もなく一目で「私」を有望な人間と見ることができたのである。

## 2. 「死」から「生」への転換

「私」の「若き日の思い出」は、幼い頃に体験した死の恐怖から始まる。「人並みはずれて臆病」だった「私」の死への恐怖は、主に兄弟（特に姉）および父親の死などの体験に起因するという。このような成長環境に置かれた「私」は、死を間近に考えざるを得なくなり、死の恐怖を感じながら、二十一歳を迎えたのである。

二十一歳と言えば、ちょうど「私」の姉が亡くなった歳でもある。つまり、姉が死んだ年を「私」が迎えたという形となっている。偶然にもこの不吉な歳に、「私」はひどい風邪を引いてしまった。「私は母の傍にみると、病氣のことに超越できないと思」ったので、母のもとを離れ一人で養生地K海岸に出かけることに決めたのである。そして、K海岸に行くことを契機に、「私

の人生に大きな変化が生じていくことになるのである。

第一に、「私」は母から離れてかえって咳が出なくなっている。そして何よりも、かつて「死といふことを考へずには、一日もゐられなかつた」「私」が、「何かこの世に生れて来ただけのことかしたいやうな気がして」、「生命は内からあふれて来て、じつとしてゐられなくな」ったと思えるように、生命の喜びを感じ始めるのである。

また、臆病もので夜が好きではない「私」だったが、ある月のいい夜に、はじめて一人で海岸に出てみた。そこで、「私」は同級生の宮津に遭遇すると同時に、人生の伴侶となる正子にも運命的に出会うことになった。それをきっかけとして「私」は正子の家族と交流するようになり、その交流によって「私」の成長物語が展開していくのである。特に、前にも触れたが、宮津の父が「私」に与えた影響は大きいものであった。

宮津の父は次のように語っている。

人間と云ふものは純粹さを失つたら何処まで迷ひ出すかわからないものです。本来の生命といふものをどんな時でも見失はないそれが大事なのです。(三五)

大事なこと、なくては叶ぬことは一つだと云ふことは本当です。それはすべての人が人間らしく生きられると云ふことです。(中略) 本来の人間はどう生きるのが、本当か、純な人生の声を聞くことを忘れないことが大事なのです。(三六)

これは「生命」の大切さを明示したものである。宮津の父は、人間らしく「生きる」ことを理想としているのである。このような宮津の父の言葉が、今まで死ぬことばかりを考えていた「私」の心に大きく響いたに違いない。そして、「私」は死の恐怖を背負い、恥ずかしがりながらも、文学の道を目指して生きていく決意をするようになったのである。

宮津の父は「私」の考え方に同感を示し、次のように言っている。

恥しがることはないでせう。其処が日本人らしい、自然に甘え、人生に甘え、喜んでそのふところの中に入つてゐるわけなのです。私も同じ考へです。日本人は中庸の国民です。自然の愛児で満足してゐるのです。実に人間らしい国民です。ですから私は、日本人の欠点は知つてゐますが、日本人は大好きです。(五六)

「私」と宮津の父の会話のやり取りからは以下の意味を読み取ることができる。つまり、人間は死ぬものであり、常に死の恐怖と背中合わせになりながら、生きて行こうとする生き方、いわば「自然の意志」に従う生き方こそが、人間らしい、しかも日本人らしい生き方なのである。ここでは、日本人を賛美し、日本人とわざわざ限定していることから、作者の日本人としてのアイデンティティーの感情が表出されていると考えられる。このことは、作品執筆時の時代背景、つまり戦争期という時代性をも連想させる。

さらに、戦争の現実が切に感じられる場面が次の引用である。

我々は生きぬいたものゝ子孫です。どんな目にあつても生きぬいた者の子孫です。だから我々は今後どんな目にあつても生きぬくだけの力を持つてゐるはずです。(中略) 我々は生きぬく者です。どんな時でも絶望することを知らない。立つて進めない時は、はひずつても進んで来た人々の子孫です。よく生きて来てくれたと思ひます。その生命力を我々は内に感じてゐます。(九一)

これは、宮津の父が人間の生命力のしぶとさを訴えたものである。これに呼応するかのよう、「私」が正子に書いた手紙の中に、次のような詩が記されている。

我等も生きぬくのだ／どんな事をしても生きられる限り／生きぬくのだ／あなたがわきにゐるのだ／我等は生きぬくのだ／生きぬくのだ／日本人として／大日本人として／生きぬくのだ。／ありがたいことだ／目にありがた涙をためて／私達は生きぬくのだ／貴き父、貴き母／そ

の父と母、その又父と母／無限の父と母／その生命が私達の内に生きぬくのだ。万歳。(九六)

作品の終盤に記されているこの引用は、作品の最初に書かれている様々な死に対する恐怖とは対照的に、「私」の「死への怖れから、どんなことをしても生きぬくという転換<sup>10</sup>」を明示しているものである。

さて、「死から生への転換」を明示する「私」の成長物語とは一体何を意味しているのであろうか。それを解明するためには、作品の時代性という問題を取り込んで考えなければならない。

先述した通り、この作品は敗戦直前とその直後に渡って執筆されたものである。敗戦直前の日本の情勢を振りかえって見ると、時代はすでに太平洋戦争の後半に入り、日本軍の作戦が次々と破られ、空襲も絶えないという状況であった。こうした情勢に置かれた武者小路は当然のことながら「死」という問題に直面させられていたはずである。そのため、幼少期に抱えていた死に対する恐怖を思い起こしながら、作品に取り組んだものと考えられる。それは「私」の死における経験談と重なるものである。しかし、死を恐れながらも、なお力強く生きて行かなければならないというのも現実であった。そうした状況下で、突然の敗戦が宣告され、落胆と虚無感の次に襲ってくるものは、なんと言っても安堵の気持ちであろう。作品の後半における「生きぬく」「生命力」云々の描写はおそらく当時の武者小路の心境が体現されたものであろう。

つまり、戦中においてはどのように死と向き合いながら生きていくのか、また戦後においては混乱の中をどう生き抜いていくべきなのか、といったメッセージが託されているのではないかと考えられる。

前にも触れたが、大津山氏は、この作品にはほとんど戦時色が感じられず、戦争末期の作品とは思えないと述べている。しかし、これまで見てきた「死から生への転換」を主題とする主人公の心境変化などから考えれば、むしろこれは戦争末期（から戦争終結直後の時期）においてしか書けない作品なのではないだろうか。

### 3. 母性イデオロギーの表象-母性賛美

「私」が三歳のときに、父が亡くなったため、「私」の思い出には父親像がほとんど存在せず、代わりに母親が大きな位置を占めている。また、六人の子供を失った母は女一人で「私」と兄を育ててきたため、「私」と母の絆の深さが人一倍のものであることは想像に難くない。たとえば、宮津の母に会ったとき、「私にとって私の母程、神聖な母はない」と思ったり、療養地で波の音を聞きながら、「何といふことなしに母のことを思ひ出した」というように、「私」にとって母の存在は格別なものであることが分かる。しかし一方で、「私」と母の間の確執も明白に描かれている。それは、特に「私」と宮津家との交流に反対していることに現されている。

「私」から正子の囲碁の話聞いた後、母は「私は女の子のくせに碁をやることは賛成出来ないね。自分の娘に碁を習はせるなんて宮津さんの家庭も余程変った御家庭だね。私は話を聞いただけでもいゝ感じがしないよ」と言い、強い不快感を示している。ここだけでも、「私」の母には、慣習が根強く残っており、いわば古い母親像をうかがうことができる。

母は「私」がひどい目に遭いはしないかとばかり心配し、「私」と宮津家との交流を禁じようとしている。その母の態度に反発はするものの、主人公にとって母の愛は疑うべくもないものである。その母の愛について、「私」は次のように述懐している。

私は自分の母を母として崇拜してゐるのです。いゝ母を持つたことをいつも感謝してゐますし、自慢にもしてゐます。母が居てくれて野島の家は保つことが出来たのです。母は三十五歳で夫を失ひましたが、それから母の行為には一点の非難のうち所がなく、少しの曇りもありませんでした。私はいつも母の側にゐて、母のすることは一から十まで見て来ました。私は少しでもへんなことがあると忘れられない質なのですが、母には少しも後ろ暗い点がないのです。このことは私達にとっては仕合わせなことでした。母は兄と私を愛し育てることだけが、毎日の務めでした。(二九)

ここには、「私」の母に対する意識がはっきりと描き出されている。と同時に、このような「私」の母の生き方には、「母となった女性は、子の母としてだけ生きるもの<sup>11</sup>」という普遍的な母性観が現れているように思われる。

そうした母性観を裏付けるかのような、次の描写も合わせて見てみたい。

実際この世で私が甘える事が出来るのは母だけです。(中略)／私は何となく母の今迄の寂しい生涯が考へられて来ました。母は実際私達の為に犠牲になつて、生きて来たのです。そして私達が少しでも元気だと、喜んでくれるのです。そして私達が少しでも元気がないと、心配して、何とかして慰めてくれようとするのです。(四三)

船橋恵子氏によれば、日本の「母性イデオロギー」には、次の三つの特徴が存在している。第一の特徴は、「性別役割分業意識の強さ」であり、たとえば「日本社会では、育児は母親の天職であるという観念が支配的である」ということが挙げられる。第二は、「子ども中心主義である」。たとえば、「日本社会では、子どもが優先され、母親は子どものために自己犠牲を強いられるのが当然という風潮がある」。第三は、「人間関係の距離のなさである」。特に、「日本的母子関係は特殊密着的である」と挙げられている<sup>12</sup>。

主人公「私」の場合、父親不在の家庭であり、彼の母は父親の役割を兼ねて子供を育てて来たと考えられる。そのため、「性別役割分業」という特徴は明確には表されていない。しかしその代わりに、上述の引用に見られるような「私」の母の生き方には、「子ども中心主義」という特徴が特に強烈に映し出されているように見て取れる。

つまり、「私」の母の姿は、まさに山村賢明氏が指摘した、子供のために自己犠牲を厭わない、苦勞する日本の母のイメージが再現されている。またその姿からは、「女性がひとりの人間として認められず自らの人生を持つことができないとき、子どもの成功によってしか自らの存在を確認できないので、陰武者となり、子どもに一体化しつつ生きる<sup>13</sup>」という母親像の基本的な構図が看取される。

女性は従来、自分の志望や野心を自らの力で実現する道がほとんど与えら

れていなかったため、それを夫や子供を通して果たそうとする傾向が強かった。換言すれば、女性の幸福や成功はつねに何かに依存してのみ得られるのである<sup>14</sup>。特に「私」の母の場合、夫を失ったため、子供の成功を除いてはもはや自分の幸福はないと考えている可能性が高く、子供を本位とした生き方しか選択肢がないとも言える。

「子ども中心主義」の延長線は、母性イデオロギーの第三の特徴である「人間関係の距離のなさ」であると考えられる。つまり、母親は子供に対して距離をとらずに一体化する密着関係を持たなければならないというイデオロギーである。二十一歳になっても「私」の自主性と独立性に信頼を寄せない「私」の母の態度こそまさにそれである。

こういった母性イデオロギーは、宮津の父が同様に自分の母の一生を題材に書いた「母の面影」という文章からもうかがえる。簡単に説明すると、「母」（宮津の父の母—以下同様）は嫁入り当時、父親に言われた「何事も辛抱せよ。いかなる時にも愚痴を言ふな」という教えに従い、「辛抱の一生」を送った。姑、小姑との関係がうまくいかないとき、「母」は〈私〉（宮津の父—以下同様）がいなかったら、もう辛抱ができないと何度も思ったが、〈私〉のために我慢してきたし、ようやく峠を越え、最後には〈私〉の祖母にも認められるようになった。しかし、「その代り父（〈私〉の父—引用者注）は時々泊ってくる夜があり、今迄知らなかつた苦勞が又一つふへた」。だが、夫に失望した「母」は「私を育てる事に夢中になれたので、母も辛抱出来た。母は私の教育にはありたけの力を尽してくれた。（中略）私の教育に、母は母の後半生を言葉通り捧げてくれた」のである。

このように、子供のために自己を犠牲にした「母」の姿を宮津の父は賛美し、自分の娘正子にも肖って欲しいという。そして、この「母の面影」を読んだ「私」は正子に対して以下のように言っている。

母となれば、日本の女の大部分は実に立派に自分を犠牲にして子供を教育してくれる人達と思ひます。あなたの祖母さん、あなたのお母さん、私の母は、その代表者だと思ひます。日本の母はいくら讚美してもいいと思ふのですよ。いくら苦しい時も耐へ忍ぶ、その力こそ無限の力で、

日本の柱と思ひますね。(一〇三)

以上から、「母」とは「我慢」の代名詞であり、「わが身を犠牲にして子に尽くす」という母親の姿が肯定的に捉えられていることが分かるのである。このように見てくると、「私」も宮津の父も、延いては作者までもが、こうした母性愛への賛美によって、母性イデオロギーをはからずも物語ってしまっていると言えよう。

加納実紀代氏は、十五年戦争の時期が、「母親たちがもつとも讃えられ、もつとも大切にされた（少なくとも言葉の上では）時期であった」と述べ、「山村賢明氏の精緻な分析によって明らかだが（『日本人と母』）、とりわけ戦時下、とくに日中戦争から敗戦にいたる時期においてはそうであった<sup>15</sup>」と指摘している。

また、中寫邦氏は「国家的母性—戦時下の女性観—」という論考の中で、決戦期（太平洋戦争突入後）の国家の期待する母性は、次のような三つの型に分けることができると記している<sup>16</sup>。

一は、女は私的な母性と公的な母性と両方を所有するが、後者の公的母性とは国家に有用なる母性であり、前者よりも優位に立つものだというもの。

二は、私的母性は国家的目的に収斂され、子育てそのものも国家の子の育成であり、そこに母性の意味があるとするもの。

三は、自然的な母性と理念的な母性を国家が弁証法的に統一するところに、国家的母性の存在があるとするもの。

しかし、作品に現れている母性観を、以上のような、いわゆる戦時下の母性イデオロギーと単純に結びつけるのは、一見、困難であるようにも思われる。また、作品連載に先立って、五月十九日の紙面に掲載された「作者の言葉」に、武者小路は「たゞ私は貴き母の思ひ出を、事実をかゝずにかいておきたい、母の記念像をつくつておきたいと思ふのです<sup>17</sup>」と作品の執筆動機を語っている。

だが、作品の最後になると、「日本の母」という言葉が繰り返されており、このように作者があえて「日本の母」というものを指摘しようとする描写に、戦時下の母性イデオロギーとの関係がまったくないとは考えにくい。そのことは、先にも挙げた「日本の母はいくら讚美してもいいと思ふのですよ。いくら苦しい時も耐へ忍ぶ、その力こそ無限の力で、日本の柱と思ひます」といった台詞などからもうかがえるのではないだろうか。

つまり、戦争末期における戦況の不利、あるいは敗戦後における混乱した状況の中で、自分の母を題材にし、母性を賛美しながら、その母性に内包される「無限の力」を説くことによって、不安を抱いている人々に安らぎを与え、希望を持たせようとするのが、本作品に託されている作者のメッセージであると考えられる。

しかしその深層には、子供のために耐え忍び、自己を犠牲にする一般の私的な母性像と、その力こそが「日本の柱」であるという「国家に有用なる母性」、すなわち公的母性像にまで高められていく傾向をこの作品においては垣間見ることができると考えられる。そのため、上述した作者の単純な動機とは裏腹に、この作品には戦時下の母性イデオロギーの一側面をもうかがうことができると思われるのである。

実際、「私」と同様に、武者小路は三歳のとき、父親を亡くし、母親によって育てられてきた。「父の味は知らない。母の味は知りすぎてゐる<sup>18</sup>」といった描写があるように、武者小路にとって母は特別な存在であることが想像できる。そんな母に敬意を表すために彼はこれまでも母を題材にした文章をいくつか書いてきた。しかし、その内容の殆どが子供のために自己を犠牲にする辛抱強い母性像ばかりであった。前述したように、本作品に見られる本来私的であるはずの母性像を公的母性像にまで高めていった描写はむしろまれであると言えよう。こうした母性像の変化こそが注目すべき点なのではないだろうか。

#### 4. 「生殖」の強調と優生思想

母性イデオロギーが色濃く綴られる一方で、「生殖」の重要性および優生思想が力説されている一面も本作品の特徴であると思われる。以下、それに

ついて詳しく見ていきたい。

「私」は恋愛を自然の営みと見なし、次のように言っている。

肉慾は自分と相手を動物にします。しかし恋は自分と相手を理想的なものにしたいと思ふやうに出来てゐます。自然はなるべくいゝ子を生ましたがつて、人間に恋愛と言ふものを与へてくれたのです、ですからなるべく理想的な子を生む為にはなるべく理想に近い相手をさがさねばなりません。(六六) (傍線部は引用者)

また、「私」は結婚と生殖の関係について「結婚すれば子供が出来る、それは当然な事です。よき子供を生む為に結婚と言ふものが必要であるし、又美しい儀式にもなるわけです」と思っている。

ここでは、「恋愛＝生殖」もしくは「結婚＝生殖」といった図式が構成されている。「私」にとって、恋愛にしろ、結婚にしろ、生殖とは切り離して考えられないものなのであろう。そして、傍線部からは、「私」の優生思想をもうかがうことができる。

こうした観念に関連して、宮津の父も次のように考えている。

私はいゝ孫が生まれることを信じてゐるのだ。だからこの結婚を主張したのだ。野島さんの家も、私の家も頭のいゝ人が生れる家だと、自分では信じてゐる。／いゝ子を沢山つくるのが健康な親の義務だよ。(中略)／沢山な程いゝ。出来の悪いのは困るが、出来のわるい子は出来るわけではないと思つてゐる。出来のいゝ子が沢山生れたら、こんな愉快なことはない。／お前が野島さんを好きになつたのも、実は生れてくる子がお父さんを選択するのに他ならないのだ。(九十)

以上の引用から、宮津の父も「私」と同様、「恋愛＝生殖」、「結婚＝生殖」といった観念の持ち主であることが分かる。そして、同じく優生思想を唱えている点も見逃せない。あえて違いを挙げるならば、宮津の父が子供の多産を大いに鼓吹しているところが注目すべき点である。

このような生殖、多産あるいは優生思想といった言説からは、戦時非常体制が想起される。戦時下の日本政府は、「人は戦争の根本条件」であるとして、健全優秀な国民を「生めよ殖やせよ国のため」というスローガンのもと、「国民優生法」を公布し、「結婚十訓」や「人口政策確立要綱」などの政策を実施した。上述した「私」と宮津の父の言説からは、こうした戦時体制に当てはまる部分が実に多く見られる。しかし、作品が執筆された当時の時代背景が戦争末期であったということから考えれば、そうした戦争イデオロギーの要素が薄められていたことも認めざるを得ない。その上、子供の結婚を急がないと言っている宮津の父の態度は、「結婚十訓」の「成るべく早く結婚せよ」という政策から逸脱したものであるとも言える。では、生殖の強調などといった描写からは、何を読み取ることができるのか。あるいはどう読み取るべきなのだろうか。

「生殖」への強調は女性の「産む性」を連想させる。もちろん、妊娠は女性一人ではできないことであり、「いゝ子を沢山つくるのが健康な親の義務」（傍点は引用者。以下同じ）ともあるように、作者が女性について「産む性」を強調しようとする意図は明確には提示されていないかもしれない。しかし、女性が出産という生殖機能を有している以上は、生殖ということが強調されるとともに、女性の「産む性」という一面が強調されてしまうことは事実である。

「産む性」とは、「産むべき性」ではなく、「産む可能性を持った性」、つまり「母性機能を身体に内蔵した性」といった意味であるはずなのだが<sup>19</sup>、「産む性」というと、しばしば「産むべき性」としてしか捉えられない傾向がある。「私」と宮津の父の言説はそれを裏付けるものであろうと考えられる。

宮津の父は娘の正子に「私はお前が沢山子を生んでくれるといゝと思つてゐる」と言い、産むことのみならず、子供を多く産むことをも要請する。また、「私は勉強したり、仕事したりして退屈すると、孫を相手に遊ぶのだ。きつと自分が生れかへつたやうな気がするよ。一人位は、祖父さんそつくりの子供が出来、俺の出来なかつたことをやつてくれる」とも言っており、産むのは女性であるのに、彼は自分の、あるいは「家」の都合で女性に子供を産ませようと考えている。彼の観念は、女性は子供を産むべきだとか、子供が

いてこそ家族であり夫婦であるといったステレオタイプな価値観を強固にするものであると思われる。こうして、女性は産む道具としてしか見なされておらず、女性の「産む、産まない」ことへの主体性は完全に無視されてしまっているのである。

むろん、人類が存在し、存続する限りは、子供を産み育てる営みがある。そして、人間にとって、この営みは人類の再生産における重要な課題でもあることが認められる。「人類が滅亡しなかつたことが不思議に思へることがある。よく生きぬいて来たものと思ふ。誰が何と言はうと我々の先祖はともかく一人の子供を生むまで生きぬいて来た事は事実でさもなければ我々は生れるわけではない」とあるように、宮津の父にこう言わせた作者の意図にも、そういう人類再生産の課題が包含されているように考えられる。

だが、裏を返せば、人類再生産の課題というようなメッセージが伝えられる時、発信者の意図とは別の問題が発生してしまうことにも注意しなければならない。すなわち、先述した「産む性」とは「産む可能性を持った性」という意味であるはずなのだが、男性登場人物の「産む」ことへの過大な意味付与は、逆に「産めない」あるいは「産まない」女性に対する偏見や差別といった観念を浮き彫りにしてしまうのである。

また一方で、あたかも「優秀な」子孫だけを残すべきだと説いているかのような「私」と宮津の父の優生思想は、障害者あるいは障害者の子供をもつような親にとって非常に残酷なものである。つまり、「いゝ子を沢山つくるのが健康な親の義務だ」とか「出来の悪いのは困る」といった言説には、まさに「不健康な親は（たくさん）産むな」といった意味が潜在しているのではないと思われる。

そうした優生思想は人間としての権利や自由が蔑視されることを意味しており、性差別の枠を超えた、いわばもう一つの差別が生じてしまうことへと繋がっていくように思われるのである。

## おわりに

以上のように、本論では、「私」と宮津の父との関係性を明らかにすることからはじめ、「私」の死から生への転換過程をたどりながら、作品に見られる

母性賛美、生殖への強調と優生思想の解析を試みてきた。

それまでも女性に対して軽蔑的な意識の強い傾向があった武者小路であるが、本作品では「私は女を軽蔑する人をよく見ますが、その人達には私がかう言ひたく思ふのです。あなたの母も女です。母を軽蔑なさるな」という台詞を登場人物に言わせており、一見すると彼は今までの偏見から一変し、女性（とくに母性）を尊重するようになったかのようにも感じられる。

しかし、彼の母性賛美の深層には、母性イデオロギーの支配下のもと、母親に一人の人間としての権利（子育てを楽しむ余裕をもつこと、自分の人生を選ぶこと、働くことなど）を認めないという、いわばもう一つの性差別をうかがうことができるのではないかと思われる。

また、「生殖」への強調や優生思想からは、武者小路が依然として女性に対する偏見を持っていると同時に、そのような性差別にとどまらず、一般的な人間としての権利や自由までも蔑視する、もう一つの差別を有していることが明らかとなったように思われる。

本作品は、主として「私」と正子の恋愛物語によって構成されており、戦争またはそれと直接的に関連するような言葉はほとんど登場していない。そのため、一見すると、戦争とはまったく無縁の作品のように見られる。

しかし、「私」が「死」の恐怖を克服し、「生」の希望を見出したとするストーリー、また一見私的な母性としてしか描かれていないように見えるが、実際にはその深層に「国家的母性」の一面をも覗かせている「母性賛美」という、戦時下の母性イデオロギーの表象などから考えれば、本作品は戦争イデオロギーを補強する機能を確かに果たしていたように思われるのである<sup>20</sup>。

※ 【テキストの引用は、小学館版『武者小路実篤全集第十四巻』（平成二年二月）による。】

## 註

- 1 大津山国夫「解題」『武者小路実篤全集第十四巻』（小学館、平成二年二月）p.659

- 2 注1に同じ p.660
- 3 武者小路実篤「後書き」『若き日の思ひ出』（『武者小路実篤全集第十四巻』同前掲書） p.659
- 4 引用は『武者小路実篤全集第十五巻』（小学館、平成二年八月）による。  
p.417-p.435
- 5 注1に同じ p.660
- 6 大阪教育大学国語教育第一ゼミナール「武者小路実篤『若き日の思い出』をよむ」（『国語と教育』平成十二年三月）。 p.26
- 7 大津山国夫「解説」『武者小路実篤全集第十四巻』（同前掲書） p.616
- 8 「死から生への転換」という部分は、香内信子氏の「『若き日の思ひ出』（『国文学解釈と鑑賞』平成十一年二月）を踏まえた上で論じている。  
p.129-p.130
- 9 なお、もう一つの特徴とは、「終戦を境にして、あの狂瀾怒濤きょうらんどうの当時の日本の真只中で、いかにこの老大家の詩魂が、澄み切った筆を駆使して、一日も休まず、この長編に打ち込まれたかをまざまざと知り得られることである。（中川孝「解説」『若き日の思い出』新潮文庫〈昭和三十二年九月〉所収） p.226-p.227
- 10 注8に同じ p.130
- 11 大日向雅美『メディアにひそむ母性愛神話』（草土文化、平成十五年五月）参照。
- 12 船橋恵子・堤マサエ『母性の社会学』（サイエンス社、平成四年三月） p.17-p.18
- 13 山村賢明『日本人と母』（東洋館出版社、昭和四十六年三月）参照。
- 14 津留宏『古い母・新しい母』（黎明書房、昭和三十四年十月）参照。
- 15 加納実紀代「"大御心"と"母心" — "靖国の母"を生み出したもの」（『思想の科学』昭和五十二年九月） p.102
- 16 中島邦「国家的母性—戦時下の女性観—」（女性学研究会編『女のイメージ』勁草書房、昭和五十九年六月） p.254-p.255
- 17 注1に同じ p.659-p.660
- 18 武者小路実篤「母に感謝してゐることなど」（『武者小路実篤全集第十七巻』小学館、平成二年六月） p.340
- 19 青木やよひ『母性とは何か』（金子書房、昭和六十一年十月）参照。
- 20 ただし、作者自身が意図的に戦争に協力していたのか、という問い自体

を本論ではとらない。

(yanghsiumei@hotmail.com)